

サステナブルな観光を具現化する

株式会社星野リゾート・アセットマネジメント
チーフ・サステナビリティ・オフィサー 菊池 昌枝

1. 星のや軽井沢と星野リゾートのサステナブルな背景

長野県軽井沢町にある星のや軽井沢とその周辺は株式会社星野リゾートの創業の地である。過去100年余りの自然との共生を背景に2005年星のや軽井沢は創業。その後土木学会デザイン賞を5年おいて2度いただいた。

2008年 選考委員特別賞受賞 星のや軽井沢

2013年 最優秀賞 星のや軽井沢 (ハルニレテラス)
時間をかけて土地の歴史と人の営みを、自然を尊重しながら幾重にも重ねて思考し設計された場所だといえる。当時の星のや軽井沢の本賞受賞時の講評には『4.3haの谷間空間の面的再開発として土地の使い方が秀逸であり、土木・建築・造園・エネルギー等の分野が連携し完成度の高いデザインを実現した本作品は、土木デザインに対する示唆が極めて大きいと考えられる』¹⁾と記されている。

この土地は東西を丘陵に囲まれた谷間でありそこを東側から敷地を囲うように湯川が流れていく。敷地内には発電用水としてつくられた2つの池を施設の中心とし、客室やパブリックスペースのある棟が並び、「谷の集落」のような空間を構成している。谷の集落の住人になった宿泊客は池とその水の音や流れに耳を傾け、隣接する森の香りと風景を堪能しながら寛ぐという、まさに五感を解放した滞在ができる。エリア内は池だけでなく、斜面を利用した棚田の構造をした緑地があり、星のや軽井沢以前から植えられていた大木はそのままに、構造物は樹木



星のや軽井沢の空中写真。
手前の大きな屋根が「集いの館」

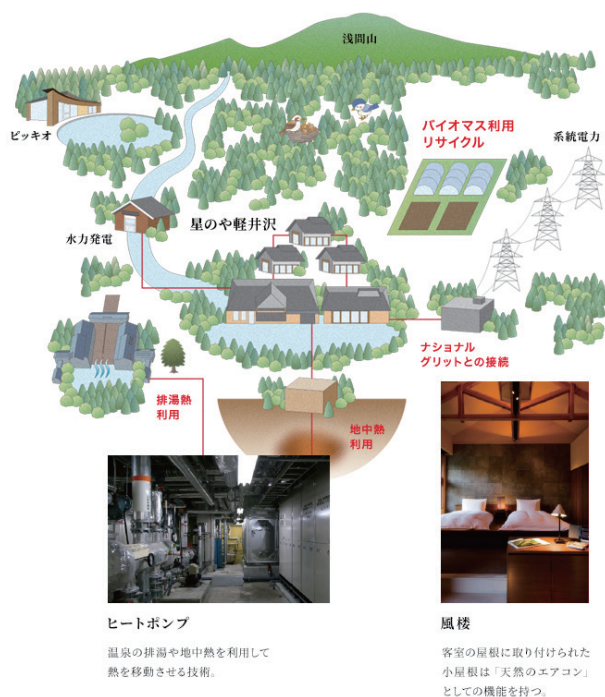
を回避し「保全」を優先した。また、建築デザインも谷の斜面地形にあわせて人々が集まる場所は谷の低い場所に「集いの館」や高い場所にはスパや温泉などのパブリック施設を配置し、宿泊室は池に沿った「水波」、谷の斜面側に「山路地」、そして池と同じ高さの「庭路地」と地形に合わせ22タイプ77室に分けて造られた。同時にこのエリアからは水力発電と温泉排湯を利用して客室の暖房の一部が賄われている。

このエリアの水力発電、樹木の保全、ムササビの止まり木や巣箱は、創業当時までさかのぼる。電気が通っていなかった大正時代に川の流れを利用して木製水車で発電を開始したのは1917年。また日本野鳥の会を発足した中西悟堂氏は、星野温泉に滞在した際「今までは野鳥を食べていたが、これからは見て楽しむ時代になる」と話し、星野エリアと隣接する国有林を、世界的にも多種類が生息する野鳥の宝庫であると指摘。その意を受けて、中西悟堂氏とともに生態系の保護活動を働きかけた結果、その国有林は1974年全国で初めて国設の野鳥の森に指定され、現在は野生動植物のレンジャー「ピッキオ」²⁾に活動は引き継がれている³⁾。



浅間山麓のツキノワグマを守る
子供インターンシップ

このように土地の形の基盤に生物多様性があり生態系が確立している。それを保全しながら水や温泉など自然資源から生態系サービスを楽しむことで観光事業にも不動産にも反映させる一貫した思想によって、星野リゾートは土地の記憶が今に現れている空間づくりを達成している。

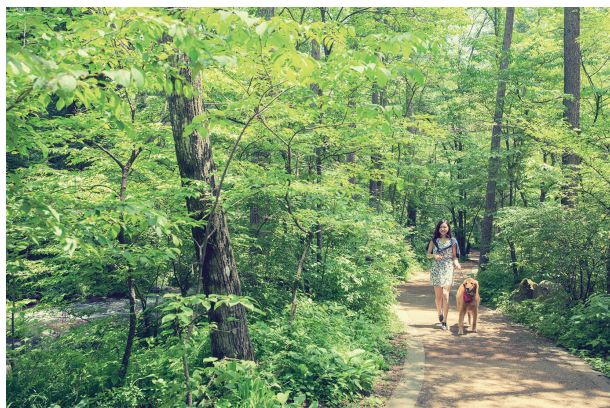


自然への負荷を最小限に抑えるため、
エネルギーを施設エリア内で生産する活動「EIMY」

2. 自然との境界線がないハルニレテラス

宿泊施設「星のや軽井沢」から国道146号線へ林の中を歩いて行くと、別荘客や日帰り観光客にも使えるエリアが開かれたハルニレテラスがある。その林に沿って湯川が流れており、林と川の両方の景観を壊さないようにウッドチップの散策路が伸びている。もともとの自然環境が優先されてデザインされており、無粋な人止め柵もない。誰でも水辺に近寄り川の流れるに触れることができ、その散策路のたどり着く先にハルニレテラスがある。

2013年の先述の賞での講評に『植物の根の保護のために張り渡されたデッキは、地形に応じて高さを変え、樹木保存のための穴を穿たれながら、実に多彩な大きさとかたちの広場を林縁に描き出していた。森に引き込まれる広場、森が迫り来る広場、森に抱かれる広場、森と向き合う広場・・・』⁴⁾と



ハルニレテラスへ向かう散策路。
左側が湯川の流れ

あるように、植物・生物と人の美しい共存を可能にした。

そもそも軽井沢は明治時代より首都圏の在日外国人や日本人の「避暑地」として、キリスト教会や洋館の別荘が点在する夏を中心に賑わう地域であったが、長野新幹線（現北陸新幹線）の開通によって、首都圏からの日帰りが容易になり人流は大きく変化した。ハルニレテラスが完成する以前はハルニレの木を中心とした樹木が湯川沿いにある林だったこの場所は、自然を維持しながら商業施設群を成立させるため、レイヤーを分けることで、「既存の植生を守るしくみ」がデザインされた。

人が樹木に近づくと地形や根を傷めたりすることがあるが、ここは地面よりも高い位置に張り巡らされたウッドデッキで保護し通年管理を可能にしているのだ。ウッドデッキ上では人々が写真のようにくつろぐことができ、林の中で人および商業地域と自然との境界が問題なく成立し共存できているのが特徴だ。

生物多様性を守るランドスケープデザインを実現したのは国内では早かっただろうし、来客者自身も意識せず自然環境保全に参加しながら寛いでいる。デザインとニーズを両立しサステナビリティを達成できたのは、星野エリアの豊かな自然環境を熟知しその重要性を理解した設計者ならではの作品となっている。



ハルニレテラスのウッドデッキ

- 1) <https://www.jsce.or.jp/committee/lsd/prize/2008/works/2008j1.html> より一部抜粋
- 2) <https://www.hoshinoresorts-reit.com/ja/sustainability/index.html> 星のや軽井沢の環境の取り組み
- 3) <https://www.hoshinoresorts.com/aboutus/> 星野リゾートの歴史
- 4) <https://www.jsce.or.jp/committee/lsd/prize/2013/works/2013g2.html> より一部抜粋

3. 水辺の私邸 星のや京都

名勝嵐山の渡月橋南詰から船で10分ほどさかのぼりチェックインするという導入部は、嵐峡の絶景と波の音、時折鷺やマガモの浮かぶ姿に peaceful という言葉がこの旅館を訪れる宿泊者から聞こえてくる。旅館としての創業は文献¹⁾によると1925年(大正14年)である。嵐山の裾野に建ち、目の前に淀川水系である保津川から大堰川そして桂川に名前を変えていく流れが広がる。この川に船が通れるようにしたのは江戸期の角倉了以の保津川開削事業による。また、鎌倉時代には亀山天皇が満月の夜舟遊びで、曇りのない夜空に月がさながら橋を渡るようなさまを見て「くまなき月の渡るに似る」と言ったといわれ、川と渡月橋は春は桜、秋は紅葉と歴史的にも京都を代表する場所である。

星のや京都は2009年の冬に開業した。ここは風致地区のため再建築不可の物件であるため、明治昭和の遺構をリノベーションした。周辺には住居がなく人の気配はここだけの静謐な雰囲気が漂う。朝は大堰川の靄がたち、夜になると月が上り鹿が鳴くという亀山天皇の時代とそう変わらないのかもしれない。

まさに水辺の私邸という名にふさわしい場所だ。

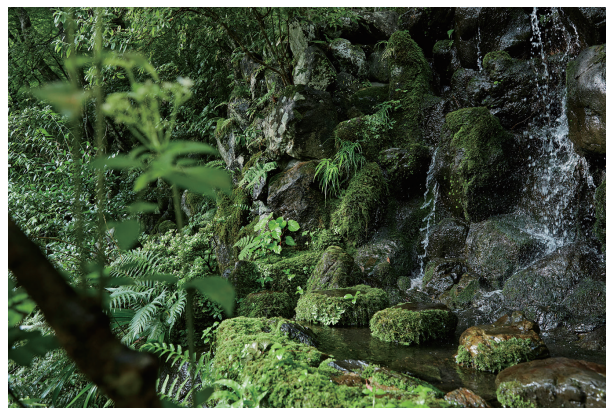


渡月橋から船で上ること10分で
幽玄な姿の旅館が現れる

4. 地形を生かし京都らしさとモダンが融合する自然を形成

この施設には嵐山の沢から引いた水が小さな滝になって池に流れ込んでいる。夢窓国師の作庭を慕っていた昭和を代表する6代目小島佐一の作といわれている²⁾。当時の石垣もそのままに苔がむし、季節になるとモリアオガエルの卵が池の上の木の枝にいくつつかついていて深夜蛇が狙ってやってきて自然の営みがそのまま残る。山中であり施設の両サイドを沢が流れていて、目の前は大堰川である。湿度は一年を通して高いのだ。庭は杉苔を中心として苔類が美しく整っている。また、軽井沢のワイル

ドな自然と違い、京都らしい庭である。人のいない美しい京都の姿がそこにあり、中心の雑踏に行く必要はない京都らしい良さが味わえるのは、年間を通じて腕の良い庭師が丁寧にその美しさを維持しているからだ。



星のや開業以前から存在する石垣と
嵐山の奥から沢水を引いた滝がある水の庭

一方でパブリックのライブラリーから外にでると「空中茶室」と呼ばれるテラスがある。真下で大堰川を望む川縁をギリギリにせめているデザインだ。このテラスに腰かけると桜の時期は目の前に花が広がり贅沢な時を過ごすことができる。



川縁ギリギリに設置した空中茶室。眼前は桜の木

5. 伝統と自然をアップデートする様々な試み

星のや京都の奥の庭は紅葉の美しい巨木がたち、その下は瓦で敷き詰められ大堰川の流れをイメージしている。日本の伝統文化を意識した造りででありながら瓦をスタイリッシュに並べることでモダンな枯山水を表現している。さらに設置している岩は鏡面磨きがなされており、木々の葉、空、雨などが映り込むしかけになっている。見る岩であると同時に座る岩でもある。

この静けさと美しさの中で伝統文化や音楽、芸術・芸能が繰り広げられたり、リラクゼーションの場など四季折々に展開され、オープンな魅力にあふれている。



紅葉の下での舞楽を楽しめる奥の庭

最後に、大堰川そのものを楽しむのにも、モダンさを組み込むことを欠かさない。保津川下りがあり、手漕ぎの鵜飼舟あり、ボートありと、いにしえから現在まで嵐山は四季の自然と川と人との関係は身近である。自社以外でも地元の民間企業や組合と協業させていただき、花見、鵜飼、月見、鮎祭りなど川にちなんだ遊びを宿泊者に楽しんでもらっている。

昨今の降水量の増加など気候変動が関与しているであろう影響はこの川でも起きているが、気象庁のデータ、上流のダムや河川ポイントのデータ、地元の船を扱う民間企業や事業者と協力しつつ災害の発生を事前に予測し防災のノウハウを培っている。



雪見障子をイメージしてガラス屋根に、竹でリラックスした乗り心地を造る

- 1) https://atomi.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2335&item_no=1&page_id=13&block_id=21
跡見学園女子大学マネジメント学部紀要第10号(2010年10月15日)嵯峨・嵐山の観光先駆者より抜粋

- 2) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E5%B3%B6%E4%BD%90%E4%B8%80>

建築設計 東 環境・建築研究所

ランドスケープ設計 オンサイト計画設計事務所

運営会社 株式会社星野リゾート

運用会社 株式会社星野リゾート・アセットマネジメント